

## 新潟市水族館の管理に関する基本協定に係る 平成28年度 業務報告書

### 1. 入館状況について

平成28年度総入館者数 525,008人（対前年度比 99.2%）

#### [総括]

リニューアル4年目を迎え、平成28年度は通年営業としては3年目となった。充実した施設を活用し、豊富な経験・知識・技術を持った職員による適切な管理運営に心掛け、お客様サービスを第一に努めた。

入館者数は、リニューアルオープン効果が薄れていく中で、525,008人のお客様にお越しいただいた。入館者数を月別で見ると、4月は週末が昨年と比べ1回多かったこともあり若干上回ったが、ゴールデンウィークでは天候不順や昨年7月にオープンした仙台海の杜水族館への観光客の流失などの影響により前年度比79.4%と大きく下回った。6月から8月にかけては前年並みを維持できたものの、9月は昨年のシルバーウィークの影響もあり91.1%と下回り、上半期終了時点で対前年度比96.6%と下回った。10月は前年並みを維持できたが、11月は祝日と週末が重なった3連休が無かったことで前年度比86.2%と5月に次ぐ落ち込みとなった。12月は天皇誕生日と絡めた3連休が1回あったことや天候に恵まれた影響で前年度比135.0%と大きく上回った。1月も寒気の影響で市内に雪が積もる日があったが週末が比較的天気良く、年間パスポート会員の方から多く来館していただいたこともあり前年度比134.0%と2ヶ月続けて大きく上回った。2月は昨年佐渡沖で水揚げされたリュウグウノツカイの標本展示で多くの来館者があった影響もあり、昨年度比84.5%と下回った。3月は昨年度並みであった。冬場の集客対策として昨年に続き、成人の日企画「新成人及びその同行者の入館料免除」や「ハロウィン」「クリスマス」「バレンタイン」「ホワイトデー」でプレゼントを配布するなどのイベントを実施した。閑散期の実施であったが、話題性により僅かながらの入館者増が図れた。

上半期終了時点で対前年度比96.6%であったが、最終的には99.2%と前年の入館者数にあと少しのところまで改善し大きな落ち込みはなかった。過去を見ても平成11年度の667,844人以来、入館者数が500,000人を超えたことはなかったが、リニューアルオープンから4年続けて維持できたことは、一定の水準を達成できたと考えている。入館者数は、「休みの連なり方」や天候により左右されるが、今後も展示や企画内容・実施時期などに工夫を凝らすことで、入館者数の増加及び平準化に努めていきたい。

パスポート購入者は、平成27年度の10,087人から平成28年度12,456人に2,369人増加し、リニューアルオープンした平成25年度の11,097人を上回り過去最多の購入者数となった。昨年度から積極的に年間パスポートの宣伝を行ったことや、館内出口付近に当日の入館券に追加料金をプラスすることで年間パスポートに切替ができるというポスター掲示やチラシの設置を継続して行ったことで、より多くのお客様から年間パスポートへの切替をしていただいた。パスポート所持者の平均年間来館回数が1人あたり5.8回であることから、パスポート購入者の増が入館者数の増に結びつくものと今後も期待できる。

申請や手帳による減免での入館者は、「身障者等手帳（対前年度比94.4%）」「老人施設（対前年度比91.2%）」「小・中学校（対前年度比93.8%）」「保育園・幼稚園等（対前年度比104.5%）」と増減はあるものの、減免利用者総入館者数は、25,953人と総入館者に占める減免利用者の割合は4.9%となっており、当館の果たすべき社会的役割はますます大きくなっていると考えている。

毎月実施しているアンケート調査では、展示生物に対する満足度が97%以上を確保しており、「色々な

魚が見れて楽しかった」「楽しかった。また来たい」「ゆっくり見れる水族館でした」「リニューアルして楽しい水族館になりました」「展示がとても充実していました」「イルカショーは説明もたくさんあってとても勉強になりました」などの感想が寄せられている。また、「食事するスペースが整っているので来やすい」「キッズコーナーもあり子供連れには飽きることなく満足」と展示生物以外でも好意的な声が寄せられている。

今後も、常におもてなしの心を持ち「来てよかった、また来たい」と感じてもらえるようなサービス提供を心掛け、新たなお客様の獲得とリピーターの確保に努めたい。

## 2. 施設の管理運営状況について

### (1) 臨時開館・閉館及び開館時間の変更

#### [総括]

臨時開館・閉館及び開館時間の変更については、新潟市水族館条例に基づき適切に実施した。

例年行っている繁忙期における開館時間の繰り上げ・延長は、行った日すべて年間平均入館者数を超えており、市民サービスの提供という目的を十分に果たしたのではないかと考えている。

まず、ゴールデンウィークは5月3日及び4日について開館時間の30分繰り上げを実施し、5日は閉館時間の1時間繰り延べを実施した。曜日の並びにより2日間のみの実施であったが、県外及び帰省による入館者が増加し、水族館へのアクセス道路が大変混雑するため、入館者の時間帯ごとの平準化や、周辺道路の混雑緩和に有効であった。

次に海の日とその前日である7月17日と18日について開館時間の30分繰り上げを実施した。8月11日～16日のお盆時期は、開館時間の30分繰り上げ及び閉館時間の1時間繰り延べを実施した。今年から8月11日に国民の祝日「山の日」が施行され、一般のお盆休みと組み合わせることで長期間の休みとなり、入館者数も平準化されたのではないかとと思われる。例年のお客様の入館動向を把握し、適切な開館時間の繰り上げ・延長を実施し市民サービスのため目的を十分達成した。また、昨年に引き続き、7月16日、23日、30日、8月6日、20日の土曜日に閉館時間を2時間繰り延べし午後7時まで開館した。直前に年間パスポート会員向けにダイレクトメールを発送し周知を図ったが、十分な入館者増とはならなかった。今後は、周知方法や時期、実施の有無についても検討が必要と思われる。

例年1月2日・3日は、市民サービスのため臨時開館を実施している。みなとトンネルからの人の流れも多く、マリニピア日本海の周辺道路は、護国神社の初詣客で、三が日は朝早い時間から込み合う。初詣客の入館促進を図り、正月開館も定着しているため今後も実施していきたい。

電気事業法第42条に基づく電気設備法定点検を3月2日・3日で実施した。従来からの休館日は「12月29日から1月1日」と「電気事業法に基づく電気設備法定点検実施のため3月の第1木曜日とその翌日」しかなく、今後も工事スケジュールを組むことが困難となる場合がある。

今後も開館時間の変更については、お客様の入館動向を把握し、適切に開館時間の繰り上げ又は延長を実施し、費用対効果を図りながら市民サービスに努めていくことが必要である。

## (2) 展示生物の状況について

### [総括]

協定書の仕様書に謳われている約 500 種、20,000 点の魚類、海獣その他水生生物の飼育展示規模を維持するとともに、展示内容の魅力の向上に努めた。

生物交換や採集等で本年度に導入した魚類輸送専用車両を計画的に運用し、展示コンセプトに沿った沿岸性魚類や深海性魚類、温帯・亜熱帯性魚類等を搬入した。

飼育困難魚への飼育展示にも積極的に取り組んだ。メバル科ハツメの展示は、当館初となり、全国の水族館でも過去 10 年間で 1 個体の記録が残っているだけの希少な展示となった。マダイ、クロダイ、ヘダイ、キダイ、チダイの新潟県産タイ科魚類 5 種を展示し、その中でも日本海を特徴づける生物として展示意義の高いキダイは、生息水温や採集方法、採集時期等の綿密な調査により、展示を実現させることができた。

また、飼育下で繁殖した生物を積極的に展示した。世界初の成功例となったアカムツ（通称＝ノドグロ）の人工育成個体の展示を「#19」水槽から「#18」水槽へ移し、飼育下では前例のない 500 個体におよぶ成魚の群れ展示を実現した。ホトケドジョウ、シナイモツゴ、キタノメダカ、ニホンイトヨを「信濃川水槽」に、クロベンケイガニ、アカテガニ、シロボシアカモエビ、アカシマモエビ、クサガメ、アカハライモリ、シナイモツゴ、トミヨ属淡水型（イバラトミヨ）を「育成室」に展示した。「にいがたフィールド」で自然繁殖したシナイモツゴ、キタノメダカ、トミヨ属淡水型（イバラトミヨ）、トノサマガエルを観察会等で紹介した。

パスポート利用者を意識し、季節感のある展示更新を心掛け、1~2 ヶ月で内容を更新する特別展示を行った。サケ、カワヤツメ、サドガエル等、季節だけでなく、地域を特徴づける生物を積極的に導入した。

タイムリーな話題として、漂着等から調査目的に搬入したクサビフグ、アカナマダ、ヤリマンボウを教育的配慮の下に、期間限定で標本展示した。また、昨年に佐渡市の定置網で捕獲されたリュウグウノツカイの剥製標本を特別展示、その後に常設展示した。

今後とも、開館以来の管理運営により蓄積してきた豊富な知見に基づき、創意工夫を重ね、展示生物の充実や、入館者に対する正確かつタイムリーな情報提供に努めていきたい。また、常に新鮮味のある展示を心掛け、リピーターにも十分満足してもらえるような魅力あふれる展示を行ってきたい。

## (3) 通年事業の実施状況について

### [総括]

#### ① ペンギン解説

ペンギン散歩道（夏期はペンギン海岸）でペンギンが歩く様子等を見ながら、分類や生態、生息地の環境、フンボルトペンギンが絶滅に瀕している背景、水族館における域外保全活動・繁殖の実施等について解説している。実施場所は屋外観覧導線に面しており、およそ 15 分の解説時間の中で気軽に立ち寄って解説を聞き、満足すると立ち去る来館者も多く、実施規模の割に参加人数の多いイベントとなっている。

なお、平成 28 年度は高病原性鳥インフルエンザの市内発生により、12 月 23 日~2 月 5 日の期間で解説を休止した。

## ② イルカショー

時刻を定めて解説を行う行動展示で、高い展示・教育効果が期待される。

水生哺乳類の自然史や環境との関わり、飼育下の健康管理、トレーニングなどを解説し、来館者の水生野生生物への理解を促し、環境保全への関心を高めてもらうことに目的をおいている。

「イルカショー」では、ハンドウイルカ2～3頭、カマイルカ1～2頭を交代で用いて1日に4～5回、1回約20分のイルカショーを行った。イルカの認知、行動能力などを解説し、楽しく学べるイルカショーを心がけた。多客期には1日の実施回数を増加し、より多くの来館者が快適にショーを楽しんでもらえるよう配慮した。毎回のイルカショー後には、イルカに関する疑問が解消できるよう質問受付を実施した。毎月実施しているアンケート調査では、概ね高評価を頂いている。

## ③ マリンサファリ給餌解説

主にオスのトドを用いて1日2回、およそ10分間の解説を実施した。体重1トン近い大型のオスを直接コントロールして飛び込みなどをさせる園館は他にほとんどなく、来館者から大変好評を得ている。

## ④ ひれあし類解説

ゴマフアザラシの若齢個体をイルカ屋内プール観覧席前にトレーナーが連れて行き、解説する形で行っている。普段はマリンサファリ内にいる動物を目の前で見られる機会は他になく、参加者の反応が良い。近づかなければ分からない体毛や口ヒゲの質感など細部まで観察してもらい、より深い情報を提供できている。

## ⑤ 日本海大水槽解説

水生生物や海洋環境に関する知識の普及を目的に、日本海大水槽前で飼育員が解説を行った。参加者は大水槽前のベンチに腰掛けてゆったりと解説を聞くことができる。展示生物の紹介から水族館のしくみまで多角的な情報を伝えられた。

## ⑥ 磯の生き物解説

磯の体験水槽で、生物を1日1回、解説を交えながら近くで観察してもらう。生物の扱い方や、生息環境への理解を深めるのに有効であると実感している。

## ⑦ アクアラボ体験

アクアラボで水生生物に対する知識と理解を深めることを目的に、顕微鏡・カメラ・大型液晶モニターを用いて、観察や解説を行った。参加者の年齢に合わせて季節感を考慮した日替わりのテーマに沿って実施し、たいへん好評であった。

#### (4) 生物展示関係イベント等の実施状況について

##### [総括]

##### ① 特別展示「春を告げる魚」

新潟県内の「春告魚」といえば、シロウオ・ニホンイトヨ・メバルなどが知られている。これら「春告げ魚」について、生体やパネルを使って分かりやすく解説した。以前は普通に見られたシロウオ・ニホンイトヨだが、現在はいずれも減少傾向で、シロウオは姿を見ることが少なくなり、新潟県内のニホンイトヨはほぼ絶滅状態であることを解説した。河川改修などにより全国的に減少傾向にある状況も紹介し、河川環境に対する意識を高めてもらう良い機会となった。

##### ② 特別展示「リュウグウノツカイの剥製展示」

平成28年2月8日に両津湾の定置網で捕獲され、同年2月9日～11日に特別展示を行った個体の剥製標本が完成し、展示を行った。実際の形や大きさを間近で感じることができる剥製標本は、生体に準ずる貴重な展示物であると考えている。

##### ③ 特別展示「魚って何だ」

まず「魚」の定義から始め、「魚」を構成するグループ、「魚」の起源から、その後続く四肢動物との系統関係など、最近の「魚」事情について紹介した。少し難しいテーマではあったが、普段接する機会の少ない系統学の考え方に触れてもらう良い機会となった。

##### ④ 特別展示「新潟のサンショウウオ」

あまり知られていない新潟県に分布するサンショウウオ科5種と、同じ有尾目に属するアカハライモリ（イモリ科）を紹介した。併せて、新潟県には自然分布しない日本固有種かつ世界最大の現生両生類である特別天然記念物オオサンショウウオも特別展示した。絶滅のおそれが増しているサンショウウオの現状について考えてもらう良い機会となった。

##### ⑤ 特別展示「クサビフグ標本展示」

平成28年12月19日に両津湾の定置網で捕獲された新潟県初記録となる個体を特別展示した。希少種の実物を間近で見ることができる良い機会となった。実際の形や大きさを間近で感じることができる生鮮標本は、生体に準ずる貴重な展示物であると考えている。

##### ⑥ 特別展示「アカナマダ標本展示」

平成28年12月25日に胎内市に漂着した個体を特別展示した。希少種の実物を間近で見ることができる良い機会となった。実際の形や大きさを間近で感じることができる生鮮標本は、生体に準ずる貴重な展示物であると考えている。

##### ⑦ 特別展示「ヤリマンボウ標本展示」

平成29年1月24日に胎内市に漂着した個体を特別展示した。希少種の実物を間近で見ることができる良い機会となった。実際の形や大きさを間近で感じることができる生鮮標本は、生体に準ずる貴重な展示物であると考えている。

##### ⑧ 特別展示「アカムツ水槽リニューアル記念～アカムツ稚魚公開～」

長期の飼育・展示が困難な深海魚である本種の展示に平成 20 年より取り組み、平成 25 年に稚魚期までの育成に世界で初めて成功し、平成 28 年より飼育下では前例のない 500 個体におよぶ成魚の群れ展示を実現した。これを記念して、普段は非公開のアカムツ稚魚 0 歳個体と 1 歳個体の生体を特別展示し、パネルや映像を用いてアカムツ育成成功までの 9 年間にわたる取り組みを解説した。少しずつ明らかになってきたアカムツの生態とまだ謎な部分などに高い関心を寄せてもらえたと考えている。

#### ⑨ いきもの教室（自主事業）

※応募状況は別紙 5 のとおり

4 月から 3 月まで、全 12 回のプログラムを計画し実施した。12 回は全て違うプログラムとし、対象年齢を小学生以上に設定した（4 月と 1 月は小学 4 年生以上）。全 12 回の応募数は定員に対して 332.9%で H27 年度同様 300%を超えた。特に応募者が多かったのは、6 月の「調べてみようイルカのあれこれ」635.0%、7 月の「ペンギンをよく見よう」565.0%、8 月の「貝の標本づくり」775.0%、11 月の「魚の解剖」510.0%であった。一方で 5 月、1 月、2 月、3 月は定員割れをした。募集の告知は「市報にいがた」「当館ホームページ」などで行っているが、教室のタイトルや広報のタイミングなどが影響していると思われる。

アンケート結果を見ると、96.8%の方が「とてもおもしろかった」「おもしろかった」と回答し、参加者の満足度は非常に高かった。

#### ⑩ 田んぼ体験

※応募状況は別紙 5 のとおり

リニューアルで造成した田んぼで田植えから稲刈り、脱穀までの稲作の体験と収穫したワラを使ったワラ細工体験をおこなった。一昨年から数えて 4 回目の実施となる。当館の事前募集プログラムとしては唯一の 4 歳以上という幼児も対象にしたプログラムであることから幼児を含む親子の応募が多かった。田植え、稲刈り、稲架がけ、脱穀、ワラ細工と稲作の一連の流れを体験でき、また、そこにいる生きものと田んぼとの関係なども観察できることから、環境教育としても十分機能していると考えられる。

#### ⑪ にいがたフィールドガイド

にいがたフィールド（以下、フィールド）紹介と、そこで見られる動植物を解説するプログラムで、環境教育の機会とすることを目的に行った。入館者を対象に 1 日 1 回約 15 分間のガイドとし、6 月に 4 日間、7 月に 2 日間、8 月に 8 日間の計 14 日間実施した。累計参加者は 222 名であった。夏期では、暑さによる参加者の体調を気遣い、日傘を準備した。フィールドで見られる動植物の変化等を当館ホームページ、館内設置のモニターやガイドブックで情報発信しているが、当日に見られた動植物について職員が解説することで、フィールドの魅力をより知ってもらい、身近な水辺環境への関心を持ってもらう機会になったと考える。また、猛暑や雨天でも参加があったことから、入館者の期待にも応えるプログラムであったと感じた。

## ⑫ 佐渡自然観察会

館外で開催する体験型プログラムで、水生生物とその生息環境に対する理解、自然環境への関心を深めることを目的に行った。小学4年生から6年生を対象とし、7月25日から1泊2日で行った。事前応募による当選・参加は14名であった。対応人員は、引率が当館職員5名と委託看護師1名の計6名、総括責任者として館内待機が1名とした。島内移動には新潟交通チャーターバス、宿泊には新潟大学理学部佐渡臨海実験所を使用した。プログラム内容は、新潟大学理学部佐渡臨海実験所及び地先海岸での講義・磯生物観察、沢根海岸でのウミホタル採集・観察、尖閣湾遊覧船による海中観察、揚島水族館見学とした。実施にあたり、緊急時の安全対策を十分に検討し、役割分担を明記した事故・自然条件等の対応フローチャートを含めた佐渡自然観察会安全管理マニュアルを作成した。引率者は普通救命講習受講経験者とした。また、保護者に事前説明会を行い、看護師に参加者の健康調査票を把握してもらった。アンケート結果を見ると、「とてもつまらなかった」・「つまらなかった」・「普通」との回答が0%で、「とてもおもしろかった」「おもしろかった」との回答のみであり、参加者の満足度は100%であった。保護者へのアンケートでは、帰宅後の子供の様子や変化を問う設問で、「生き物を触れることができた」「手伝いなど進んでするようになった」「一人で宿泊したことで少し自信がついた様子」などの回答があり、意見として「今後ももっと多くこのような機会を作ってほしい」「生物の神秘さや不思議さに目をみはる感性というものを発信・育てるチャンスをお子たちに与えてほしい」「看護師も引率して下さるので安心して参加ができた」などがあった。館外で宿泊する体験型プログラムは当館初のプログラムであったにも関わらず、このような高い満足度を得ることができたことは、プログラムデザインと実施のスキルについて長年の経験の蓄積があるためと考えられる。

## ⑬ イルカバックヤードミニガイド

夏休みのイベントとして、当日に参加者を募集してイルカのガイドを30分程度行った。15日間開催し、参加者はのべ144人であった。少人数を対象にしたガイド形式のプログラムで、参加者の反応を見ながら話を進めたり、質問に即応したりと、参加者の理解度に合わせてイルカについての情報を提供できるため、満足度も高かったのではないかと考えられた。

## ⑭ デジカメ教室

フォトコンテストと連動する形で実施した。水族館での楽しみのひとつとして写真撮影があるが、アクリルガラス越しであることや暗い中での撮影のため、綺麗な写真を撮影することはとても難しい。しかし、これらの難しさはカメラの設定や撮影する際のちょっとした工夫によってある程度改善することができる。それらの「工夫」について当館職員がレクチャーすることで水族館での楽しみ方の幅を広げてもらえたと考えている。

## ⑮ 水族館裏側探検「イルカ編」

毎年行っているイルカ解説プログラムで、今年は飼育施設、骨格標本、生体等を見ながら飼育の裏側に重点を置いて解説を行った。応募は定員の130%で、昨年より倍率は低下したが、依然人気が高いことがわかった。アンケートの結果を見ると、「よくわかった」、「時間の長さはちょうどよい」という答えが多く、こちらが意図した内容を概ね伝えられていて、参加者の満足度も高かったのではないかと考えられた。

⑩ フォトコンテスト写真展

応募期間：7月1日～10月20日（応募点数 291 点）

展示期間：12月10日～1月29日（展示点数 123 点）

今回が3回目の開催。募集期間を初夏から秋にかけてのオンシーズンとし、入賞作品の展示を冬期のオフシーズンにすることで、長期間に渡っての話題づくりとなることを想定して実施した。応募点数も昨年度とほぼ同数の291点（昨年度280点）であり、本企画が広く浸透してきたと考えられる。

⑪ 大人のための水族館講座

水族館や水生生物についてより深く知ってもらふ事で、水環境について考えてもらうきっかけとし、大人に対しての教育の機会とすることを目的に2回実施した。1回目は国立研究開発法人水産研究・教育機構 日本海区水産研究所の研究者2名による「日本海のズワイガニ・ベニズワイガニ」についての講演、2回目は福山大学教授による「水族館を楽しもう」をテーマとした講演をおこなった。なお、1回目は金曜日の夜間（19:00～21:00）に日本海大水槽前スペースでおこなった。どちらも応募者は定員の20人を超えたが、会場の配置などを工夫し、なるべく多くの応募者を当選とするように配慮した。講演後のアンケートでも参加者の満足度は高かった。

⑫ 幼児・親子向けプログラム

実施日：12月5日（月）10:00～15:00

参加者：約100人（のべ人数）

新潟こども医療専門学校（4学年の1クラス）が企画した幼児・親子向けプログラムを実施した。企画にあたり、5月から11月まで3回の打合せ（内1回は授業）を行い、学生は授業の一環として取り組んだ。学生は3つのグループに分かれ、それぞれプログラムを企画実施した。冬期の平日であるため来館者数が少ないものの、来館した親子連れの多くが参加して下さった。

⑬ 成人の日イベント「バイカルアザラシ カル1/2 成人式」

バイカルアザラシが当館で繁殖してから10年経過したことを記念して、バイカルアザラシについてのより深い情報の提供と、繁殖個体カルの人工哺育の様子や成長の記録を紹介するイベントとして実施した。展示水槽前でのパネル展示（22日間）と、アクアラポでのイベント（2日間）という日程で行った。アクアラポイベント実施日の1月14・15日は大雪であったため、参加者数は想定以下となったが、多くの資料を展示しての解説、顔出し等身大フォトパネルや缶バッジ作成、ぬいぐるみを使った体重測定の体験など、子供から大人まで参加者の満足度は高い内容であったと考えている。

⑭ 育成室開放

生物育成の成果は本館地下の育成室にて通年紹介している。通常は室外から室内を見学することを目的とした部屋だが、育成の現場をより間近に感じられる新しい試みとして、室内を開放するプログラムを行った。1日1回30分間、複数の職員がいる状態で、室内を自由に見学できる時間を設けた。今年度育成した生物や稚魚などに与えるエサについて、職員は会話形式で解説した。4日間の累計見学者数は147人であり、混雑のあまり部屋への立ち入りが難しい日もあるなど、育成現場への関心の高さが伺われた。



㊴ ナイトツアー

3月に1回20名の定員で合計4日実施した。参加者は計80名と例年通りだった。参加費が大人2,000円、小人1,000円と、当館のイベントの中では高額な部類に入る企画であるにもかかわらず、ナイトツアーの人気は高い。飼育員によるツアーや乾燥ウミホタルを用いた発光実験の後、自由見学の時間を設けるこれまでと同様の内容で行った。完成されたプログラムとして継続を考える。

(5) 企画イベントの実施状況について

[総括]

① ハロウィンイベント

10月29日(土)・30日(日)各日先着150名に抽選会を行った。抽選会に参加した来館者へ年間パスポートや館内レストランで利用できるシューアイス無料券、お菓子、オリジナルシールをプレゼントした。

② クリスマスツリー展示

11月26日(土)から12月28日(水)の間、マリニピアホール(円柱水槽側)に高さ4.5メートルのクリスマスツリーを展示した。

③ 平成29年オリジナルカレンダープレゼント

毎年恒例のプレゼントとして、12月11日から引換券を提示した先着800組へオリジナルカレンダーをプレゼントした。

④ クリスマスお菓子プレゼント

12月23日(金・祝)から25日(日)の間、各日先着100人の中学生以下の入館者にお菓子をプレゼントした。

⑤ 子育て応援Ustream番組nicotto感謝祭に出店

12月23日(金・祝)に天寿園で開催されたnicotto感謝祭に出店し、水族館オリジナル缶バッジを作成した。延べ78名が作成した。

⑥ 門松展示

1月2日(土)から7日(木)の間、正面入口に門松を設置した。

⑦ 年間パスポート販売キャンペーン

1月7日(土)～31日(火)の間、年間パスポートを購入者へ館内ショップ・レストランで使える割引クーポン(大人500円分、小人200円分、幼児以下にはシール)をプレゼントした。クーポンの使用期限を2月28日までとし、期間中1,469人が購入し前年同月比196.6%(747人)となった。

⑧ バレンタインお菓子プレゼント

2月11日(土)・12日(日)に、各日先着100組にお菓子詰め合わせをプレゼントした。

⑨ ホワイトデーオリジナルグッズプレゼント

3月11日(土)・12日(日)に、各日先着100組にお菓子詰め合わせをプレゼントした。

⑩ 新潟市中央卸売市場「市場まつり」に出店

10月30日(日)に新潟市中央卸売市場で開催された「市場まつり」に出店し、パネル展示、水族館オリジナル缶バッチの作成をおこなった。

⑪ 新潟日報週刊ふむふむ編集室×トキっ子くらぶ「ふむふむ自由研究」に出店

8月6日(土)・7日(日)にメディアシップで開催された表記イベントに出店し、ミスクラゲのポリプ・エフィラ・成体の展示を行い併せてポスター展示をおこなった

⑫ 新潟大学医歯学総合病院 小児病棟への出張プログラム

1月26日(木)10:00~12:00に新潟大学医歯学総合病院小児病棟に出張し、クラゲ展示・缶バッチ作成・パネル展示等をおこなった。

(6) 専門的な調査・研究等について

[総括]

「魚類等の繁殖・育成に関する調査」「鯨類の生理に関する調査」等、飼育水族に関する様々な調査研究を行っている。また、「漂着生物調査」「地域生物調査」等、野生水族に関する調査を行い、地域の自然史に関する知見の蓄積に努めている。

日本動物園水族館協会の会議や研修会へ出席し、積極的な調査研究成果を発表すると共に、最新情報の交換等を通して飼育技術の一層の向上を図っている。また、日本動物園水族館協会種保存委員会との協力体制を維持し、絶滅の危機に瀕している種の保存に努めるとともに、調査研究を行っている。これらの様々な研究の成果をホームページで公開する等、新潟における水辺の環境・水生生物についての情報の収集・発信基地としての役割を担っている。状況に応じて、特定外来生物が生態系に与える影響や、絶滅が危惧されている希少種についての情報を積極的に発信している。

海獣技術者研究会で「受診動作におけるバンドウイルカの抜歯」について研究発表した。関東東北ブロック獣医師臨床研究会を担当館として開催し、「海獣での診察におけるスマートフォン用サーモカメラの活用」について発表した。日本飼育技術学会の依頼で講師を派遣し、「肉食性両生爬虫類の栄養管理」について発表した。日本鯨類研究協議会第1回トレーニングセミナーで「オバラント条件付け原論」「受診動作訓練：新潟市水族館と全国の水族館の現状」について講演した。

クロベンケイガニの国内初の飼育下繁殖に成功し、日本動物園水族館協会の平成29年度繁殖表彰に申請した。

世界初の人工育成に成功したアカムツ(ノドグロ)の継続育成により得られた繁殖生態に関する研究成果を稚魚とともに企画展で紹介した。生体入手の困難種なアカイサキ、ヤナギムシガレイの仔魚育成に取り組み、生態解明および展示に向けて引き続き調査・研究を継続する。

生物多様性保全ネットワーク新潟が主催する「夏休み親子魚探検隊 2016」に協力し、水生動物相を調べ、在来生態系に悪影響を及ぼす外来生物の生息状況も明らかにした。宮城県シナイモツゴ郷の会等主催の記念シンポジウムで、「シナイモツゴの遺伝的系統解析調査と水族館での保存活動」について講演した。

漂着等生物調査で、クサビフグ、アカナマダ、ヤリマンボウを調査し、貴重な生物学的なデータを得ることができた。佐渡市の定置網で捕獲されたリュウグウノツカイ剥製標本の特別展示の際には、調査により判明した生態に関する知見を紹介した。

今後も、より一層専門的な調査・研究に努め、その成果を市民へ還元していきたい。

## (7) 総合学習等の受け入れ状況について

### [総括]

文部科学省の提唱に基づく学習支援活動としての「総合学習」の受け入れを行っている。質問・インタビューを通して、子供たちに生き物や環境に関する知識を伝える場となっている。また、職業に対する関心を高めることや、職業・職種の内容や働く意義について考えを深めることを目的とした職場訪問といった目的の総合学習にも対応している。

来館した児童・生徒から、多数の礼状や感想が寄せられている。水族館や水生生物への関心を呼び起こす機会や環境保全について考える機会として、また、社会に目を向け、働くことや学ぶことの意義や大切さを理解していく場として非常に役立っていることから、今後も可能な限り受け入れを行ってきたい。

## (8) 実習生等の受け入れ及び講師派遣の状況について

### [総括]

実習生等の受け入れとして、大学生および専門学校生を対象に「インターンシップ」「飼育実習・研修」「獣医実習」「博物館実習」を行った。これは、博物館類似施設としての一面を持つ水族館として、大学生・専門学校生に実習の場を提供するという社会的貢献の側面はもちろんのことであるが、指導を通じて職員自身の自己研鑽の場ともなっているので、今後も継続して受け入れを行ってきたい。

また、アウトリーチ事業の一環として、様々な「場」への講師派遣を積極的に行った。内容は、大きく分けて「野外での観察等の指導」と「教室(屋内)での生物や仕事についての講義・指導」であるが、対象が小学生から一般と幅広く、また、派遣先のニーズに合わせた内容にする必要があることから、派遣職員の指導者としての専門性が要求される取り組みとなっている。

毎年度継続して実施している新潟大学臨海実習については、海洋フィールドを題材にできる貴重な教育学習機会であることから、今後も継続して指導者を派遣していきたい。小中学校への講師派遣は、小学校への職業講話が3校、中学校への職業講話が2校であった。本年度は、新潟市小学校教育研究会からの依頼で、教員向けの講座「水生生物の飼育法」へ講師を派遣した。

今後も、実習生受け入れやアウトリーチ事業を地道にそして積極的に行っていくことが、水族館と地域・社会とのつながりを強固にし、広げていく基礎となると考え、継続していきたい。

## (9) 市民ボランティアの活動の状況について

### [総括]

ボランティア活動の目的を大きく「水族館（専門家）と来館者（非専門家）をつなぐ役割」「生涯学習の場」「自己実現の場」の3つとして活動をサポート、コーディネートした。平成28年度は5月に新規募集をおこなった。新たに12人のボランティアを迎え、総勢81人となった。活動状況は活動日数219日、活動延べ人数589人であった。

平成28年度の活動の柱として「館内案内」「いきもの教室の補助」「アンケート調査」「研修」「磯の体験水槽解説」を設定して実施した。特に「磯の体験水槽解説」は生き物ガイドとして昨年より初めて取り組んだこともあり、昨年度の反省を生かした研修内容、および現在解説活動しているボランティアにも手本役を担ってもらいながら2回の研修を行い、研修後に解説実技の試験を実施して認定制とした。

今後とも、水族館、来館者、ボランティアの3者が満足できる活動を推進し、持続的なボランティア活動を目指していきたい。

## (10) 広報および広告宣伝について

### [総括]

平成28年度の広報および広告宣伝について、前半（4月から9月くらいまで）は県外への広報、秋以降は県内への広報を重点的に行った。併せて1月に年間パスポートの周知を兼ねたキャンペーンCMを展開した。

#### ① テレビCMとラジオCM

テレビCMは、H27年度のCMを引き続き放映したが、12月にクリスマスツリー告知バージョン、1月に年間パスポート新規購入者向けキャンペーン告知のCMを製作した。12月と1月の告知バージョンはどちらも効果があり、12月の入館者数の増加および1月の年パス購入者増（昨年度比2倍強）に貢献した。ラジオCMは、FM新潟、FMポート、FM山形、FM福島で放送した。FM群馬は3月のみ放送した。また、年間を通して毎月2回、夕方のFMにいがた「サウンドスプッシュ」内で職員が生出演して旬な情報を提供した。

#### ② 雑誌などの紙媒体への広告

雑誌などの紙媒体への広告は昨年度実績をベースにしつつ、効果的にリニューアルをアピールできる媒体を取捨選択して掲載した。

#### ③ WEB

オウンドメディアを重視した展開を行った。当館ホームページ、Twitter、LINE@、Facebookなどの更新をより頻繁に行うことで、情報の拡散に努めた。しかし、SNSについてはまだ運用が軌道に乗っているとはいいがたいため、今後より研究が必要と考えている。

#### ④ 広報・プレスリリース

ここでは、プレスリリースの他、いわゆる「広告料」を必要としない誘客・宣伝活動も「広報」と位置づけることとする。直接担当記者へアプローチする積極的なプレスリリースにより、実際に

取材に結びつくものが多くあった。アカムツ（ノドグロ）の取材は平成 28 年度も引き続き多くあり、関心が持続していることが示唆された。

#### (11) 他園館との協力について

##### [総括]

のとじま臨海公園水族館、ふくしま海洋科学館、いなわしろカワセミ水族館、サケのふるさと千歳水族館、市立室蘭水族館、東海大学海洋科学博物館、島根県立しまね海洋館、鶴岡市立加茂水族館から、魚類等の生物交換にご協力いただいた。当館で飼育下繁殖したニホンイトヨを分散飼育として、のとじま臨海公園水族館、男鹿水族館、越前松島水族館、鶴岡市立加茂水族館へ搬出した。須磨海浜水族園においては、特別展「新潟のサンショウウオ」開催にあたり、日本固有種、かつ世界最大の現生両生類であるオオサンショウウオの展示に関する行政等への手続きや生物の搬出など、便宜を図っていただいた。

上越市立水族博物館へフリーディングローンで貸し出しているコツメカワウソのフィラリア予防投薬のために獣医を派遣した。

姉妹友好館のふくしま海洋科学館をホスト館として平成 30 年に開催される「第 10 回国際水族館会議」の実行委員会メンバーとして参画している。

視察・研修として、沼津港深海水族館 12 名、葛西臨海水族園 2 名、越前松島水族館 21 名、名古屋港水族館 1 名、男鹿水族館 2 名を受け入れた。

市民ボランティア活動では、他園館視察としてボランティア 12 名がふくしま海洋科学館を訪れ、バックヤード見学や先方ボランティアとの意見交換など有益な体験を得る事ができた。

#### (12) 年間入館パスポートについて

##### [総括]

平成 28 年度の年間パスポートの購入者は、12,456 人（総入館者の 2.4%）、パスポート利用者（購入者＋リピーター）は 72,676 人（総入館者の 13.8%）となった。また、パスポート利用者の平均入館回数は 5.8 回であった。（別紙 1-2）

購入者数は、平成 27 年度の 10,087 人から約 2,300 人増加し、リニューアルオープンした平成 25 年度の 11,097 人を上回り、過去最多の購入者数となった。また、入館者総数に占めるパスポート購入者、利用者の割合も平成 27 年度と比較して多くなっている。昨年度に引き続き、館内外で積極的に広報したことが増加に繋がったと考えられる。特にヤリマンボウの標本展示を行った 1 月 29 日（日）に、1 日で 260 人も購入者があり、リニューアルオープン初日の 436 人、平成 28 年 2 月のリュウグウノツカイ標本展示の際の 329 人に次ぐ 3 番目の記録であった。昨年同様、珍しい生物の標本展示が来館のきっかけとなり、多くの市民にとって年間パスポートへの需要が潜在的にあることが改めて伺えた。今後も話題提供や特別展示などの情報提供を行い、年間パスポート会員が繰り返し来館していただくことが入館者増に繋がると考えられる。

アンケート調査での「生物の変化を発見できたか」との問いに対して、60.0%の人が「発見できた」と回答しており、テーマや季節感に沿った特別展示などを行ったことが評価されたと考えている。他にも「いつも楽しませてくれてありがとうございます」「よく利用しています。とても楽しく使っています」「いつ

来てきれいで子供も楽しんでいます」などの声もいただいている。

また、「次回パスポート購入予定は」との問いに対しては、「購入の予定なし」と答えた人が 2.5%で、86.3%の人からは「購入したい」と回答してもらうことができた。

今後も、生物の成長や変化が体感できる展示等を心掛け、リピーターに十分満足してもらえるようにしていきたい。

### (13) 市・他団体等との協力

#### [総括]

平成28年度に行政や他団体等と協力して実施した事業は以下のとおりである。

水族館の集客力アップのため、他施設・他団体との協力が不可欠であり、指定管理者だけではなしえなかったサービスを展開できたと考えている。多くのお客様から楽しんでもらい、満足してもらえたと思う。

今後も、積極的に機会をとらえ、他団体や民間の持つ多様なチャンネルを活かした事業に組んでいきたいと考えている。

#### ① G7 新潟農業大臣会合関係者の無料入館

平成28年4月新潟市で開催されたG7新潟農業大臣会合関係者へ入館料無料の対応を行った。実際に入館した関係者はいなかった。

#### ② (公財)新潟観光コンベンション協会「SLばんえつ物語」号スタンプラリー

「SLばんえつ物語」号のスタンプラリー事業に賛同し、観光スタンプ設置場所として参加した。スタンプを集めると参加市町村の特産品が当たるという企画で、新潟での観光を楽しもうという人からマリニピア日本海へ来館してもらえた。

#### ③ NEXCO「新潟・北信濃・会津 週末フリーパス」利用者への入館料割引

ETC車限定の新潟県内及び長野県北信濃地方・福島県会津地方のエリア内で、休日を少なくとも1日含む連続する2日間が高速道路乗り降り自由という内容で、優待特典クーポンを提示すると対象施設で割引等のサービスが受けられるという企画に参加し、新潟の観光促進と入館促進が図られた。

### 3. 入館料収入の実績について

平成28年度入館料収入 459,040,376円

#### [総括]

入館料の徴収事務については、協定書に基づき適切に実施した。

平成28年度はゴールデンウィークの天候不順や昨年7月にオープンした仙台うみの杜水族館への観光客の流失、曜日の影響などから入館者数(平成28年度525,008人、平成27年度529,218人)が昨年度を下回ったことに伴い、入館料収入も459,040,376円(平成27年度478,979,038円、

19,938,662 円減、対前年度比 95.8%) と減少した。また、客単価も 874 円であり、入館料収入で見ると平成 21 年度の 472,223,438 円と比較して、当時の入館者数が 489,113 人、客単価 965 円からすると一般客、団体客の減少が大きく影響したことが考えられる。

収入増対策として夏休み直前に、9 月末まで利用できる割引券付チラシ（提示で 1 組全員 2 割引）を新潟市外県内、山形、福島、長野、群馬の小学校へ配布した。発行実績のあった折り込みチラシを、平成 28 年度は子供向けに小学校へ直接配布した。また、市内向けには、11 月に冬場の閑散期対策として小学校、幼稚園・保育園に向け、3 月末まで利用できる同様の割引券付チラシを配布した。実施期間中、多くのお客様に来館していただき、一定の収入があり、観光客の来館動機付けに一定の効果があったと考えられる。

また、リニューアル後導入した大手コンビニエンスストアのオンライン端末機で入館チケットが購入できる「コンビニチケット販売」は割引券付チラシと異なり割引がないため、その影響により減少している。同じくリニューアル後導入した、会員証の窓口提示で 5 人まで 2 割引となる「JAF カード割引」も継続して実施している。

入館料の免除については、新潟市水族館条例・施行規則に基づき適切に実施した。今後とも来館する幼稚園・保育園、小学校、老人施設、福祉施設などが増え、質量ともに負担のかかる業務になることが予想されるが、団体休憩室の予約など状況を把握し不備のないよう行っていきたい。

#### 4. 管理経費等の収支決算について

##### [総括]

海水取水設備において、近年の取水先端部海底面上昇により取水口付近の着砂が進行し、取水口の埋没が疑われる現象が生じており、平成 26 年度末には平成 2 年の開館以来、初めて取水配管が全閉塞する事態が発生していた。このため早急な対応が必要となったことから、平成 27 年 8 月に取水先端部の 60cm 嵩上げ工事を行った。これにより、冬期の海水着水槽の植物片の流入が少なくなり、平成 27 年度は 1 回大型吸引車を使った除去作業を行ったが、平成 28 年度は人的排砂作業も含め 1 回も除去作業を行わず済んだ。ただし、これはあくまでも緊急対策として行った工事であり、近年の着砂状況から推測すると数年の措置であったため、恒久的な対策に向け新潟市、施工業者、水族館と協議を重ねた結果、平成 28 年度には既存取水口から取水管 200m 延長を前提とした調査ルートでの事前調査及び設計業務を行った。これを基に平成 29 年度以降、資材製作及び工事を行う計画である。取水管砂流入対策工事の事業主体は新潟市であるが、水族館の生命線である取水口の埋没防止対策は緊急の課題であることから協力しながら行う必要がある。

経費が高む工事費については、リニューアル工事で未着手だった建物・設備箇所の不具合が依然として発生しており、その都度修繕工事を行ってきた。逆に経費を抑えるため、光熱水費について夏場の最大電力を抑えるため設備の運転時間を間欠したり、空調の設定温度を下げるなど積極的に節約を行なった。また、原油価格の下落により電力会社が算出する「燃料費調整額」がマイナスに調整されたことで工事費を賄うことが出来た。その他にも周辺道路・駐車場の警備員を実態に合った配置を行ったり、特別展の会場設営を出来るだけ自前で行うなど経費節減に努めた。

また、平成 27 年度末に導入した活魚輸送車については魚類搬入に際し計画的に活動を行った。魚類購入の際、業者に依頼することなく自前で多くの魚類を購入・運搬することが出来たため、経費削減に貢献することができた。

工事については、依然としてリニューアル未着手箇所での不具合による修繕工事費が嵩むことが予想されることから、平成 29 年度大規模修繕が発生した場合は、市と相談しながら行っていきたい。

今後も「最小コストで最適な管理」目指し、かつ、お客様への快適なサービス提供を図るという基本原則に則り水族館の運営を行っていきたい。

## 5. 最後に

平成 28 年度の入館者数は、525,008 人（対前年度比 99.2%）、入館料収入は、459,040,376 円（対前年度比 95.8%）と、平成 27 年度と比べ共に減少した。事業計画書で掲げた入館者数目標値 518,000 人は達成できたものの、入館料収入目標値 495,750,000 円には及ばなかった。年間パスポート会員による入館者が増加し、個人入館券での入館者が減少したことが原因と考えられる。リニューアル効果が薄れ年々減少することは一般的な傾向ではあるが、入館者数では、リニューアル後 4 年連続で平成 11 年以来の 500,000 人を超えた。入館収入では入館者数 460,529 人であった平成 18 年とほぼ同じ水準であった。

入館者の満足度については、アンケート結果によれば、展示生物全般で、「非常に満足」と「満足」の計が 94.2%、イルカショー、解説プログラムで「非常に満足」と「満足」の計が 91.8%とリニューアルオープン 4 年目を迎えた平成 28 年度も満足度は高水準を保っている。

また、年間パスポート会員を除くお客様の来館回数については、「はじめて」が 37.7%（前年度 49.8%）と昨年度より大きく減った。年数が経つにつれ「はじめて」が減ることは当然であるが、県外からのお客様で「はじめて」が全体の 21.0%と最も多く、県外においてはまだ来たことがない観光客が潜在的に多いことが伺える。一方、新潟市内のお客様で多くは 1 回以上来館され「はじめて」は年々減少している。特に来館回数 4 回以上は全体の 19.8%と比較的多く、「また来たい」と思えるような施設づくりを心がけたことがこのような結果に繋がったと思われる。今後も、いつも来ても新鮮味のある展示に努めることで年間パスポート購入者の増加に繋げ、さらにリピーターとして何度も足を運んでいただくことで入館者数増に繋がりたいと考えている。

施設については、リニューアル工事の対象外であった箇所ですら突発的な不具合が依然として生じており、今後も十分考えられることから、工事未着手の箇所は注意深く維持管理すると共に、リニューアル工事を行なった箇所についても設計会社が提案した修繕計画に基づき新潟市と相談し、早めの対応で不具合による事故が起こらないよう努めたい。

また、駐車場は、平成 28 年 3 月に水族館脇の土地を整備し駐車場として 56 台増設した。水族館から最も近い駐車場であるためお客様にとっては非常に利便性が高く、繁忙期には当該駐車場への回転が良くなったことで、従来の駐車場不足が多少は解消されたのではないかと思われる。海岸側臨時駐車場（ブロックヤード）の管理については、「みなとトンネル」開通後、水族館のお客様以外の駐車車両が多く、いつ事故が発生しても不思議ではない状況だが、海岸保全区域内の公有財産を使用承認を受けて活用している土地であり、指定管理者単独による管理は非常に困難になってきている。とくに、海岸側臨時駐車場からの道路の横断について、交通信号がなくお客様の安全が確保できないことが懸念されることから引き続き市や警察に働きかけていく必要がある。

水族館を運営する上で大きな問題として、取水設備がある。管理経費等の収支決算でも述べたが、国土交通省の養浜工事の進展により、沖合 200mの取水口付近の海底面上昇が経年的に進行していると思われ、平成 26 年度はその症状が顕著であったため、平成 27 年度に取水口先端部の 60cm 嵩上げ工事を行い、ある程度の効果はあり、平成 28 年度もその効果はあった。また、恒久対策に向け平成 28 年度は既存取水口から取水管 200 m延長を前提とした事前調査・設計を行った。これを基に平成 29 年度から 2 ヶ年計画で工事を行う予定である。危機的状況を回避するため段階的に対策を講じているが、取水設備は水族館の生命線である海水を調達する



ための重要な設備であるため、新潟市と協力しながら進めていきたい。

ソフト面については、従来のイルカショーやマリンサファリ給餌解説に加え、アクアラボ体験プログラムやひれあし類解説など体験型プログラムを充実させている。また、スポットで実施した「にいがたフィールドガイド」や、秋期から冬期にかけての閑散期には「育成室開放」や「水族館裏側探検（イルカ編）」、「フォトコンテスト写真展」などを実施した。

平成28年11月28日関川村の養鶏場から高病原性鳥インフルエンザが疑われる事例が発生したことを受け、館内に対策本部を設置した。飼育ペンギンと来館者の安全を確保するため、ペンギン展示水槽上部に防鳥ネットの設置や来館入口及び職員通用口に逆性石けんによる踏み込み槽（靴底消毒）の設置、職員駐車場入口に消石灰の散布（タイヤ消毒）などの対策を講じた。さらに、12月22日新潟市江南区において、野鳥の高病原性鳥インフルエンザが疑われる事例が発生したため、「ペンギン海岸」では防鳥ネット対応に加え、ゾーンへの立入制限を実施した。今後もマニュアルに沿った対応・対策を行い、来館者、職員、飼育生物を鳥インフルエンザから守ることを最優先に考え被害の防止に努めたい。

WAZA（世界動物園水族館協会）の指摘により、和歌山県太地町でのイルカ追い込み漁の残酷性からイルカ入手が困難となっている問題については、引き続き JAZA 及び飼育水族館と協議しながら様々な可能性を探っていきたい。

新財団については、平成28年3月に「一般財団法人海洋河川文化財団」が設立された。その後「公益財団」移行に向け新潟市と綿密な打合せを重ねながら新潟県へ申請を行い、平成29年3月に公益財団としての認定を受けた。その間、平成29～30年度（2ヶ年）の指定管理者の指定を受けるため新潟市海洋河川文化財団・新潟市開発公社共同事業体として申請を行い、議会の議決を経て管理・運営を行なうこととなった。2年間は、新潟市開発公社からの支援を受けながら従来どおり水族館運営を行い、法人としても自立できるよう努めていきたい。

平成26年リニューアルオープンした鶴岡市立加茂水族館や北陸新幹線の開通、平成27年オープンした仙台湾の杜水族館、さらに平成30年度リニューアルオープンが予定されている上越市立水族博物館など、他園館や県外への観光客の流失が考えられる中、新潟市水族館のさらなる魅力づくり目指し「水族館業務を行う専門家集団」として平成2年の開館当初から培ってきた豊富な知識と経験を生かし、新財団へ管理者が変更した後も多くのお客様から喜んでもらえるよう、スタッフが一丸となって頑張っていきたい。